
風雲 恋姫伝

四国屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風雲 恋姫伝

【Nコード】

N6054Y

【作者名】

四国屋

【あらすじ】

PS2、PSP「風雲幕末伝」の佐幕派主人公である秋月小次郎を恋姫の世界に放り込んだ妄想を文にしてみました
なので史実の新撰組とは大きな差異があるので注意してください

ゝ序章ゝ（前書き）

風雲幕末伝未プレイの人でも判るような文を書きたい（願望）

〈序章〉

時は慶応4年（1868年）1月3日　　鳥羽・伏見戦い

京都の南方において戦が起きた

天皇中心の政治を掲げる長州藩、薩摩藩を中心とする「新政府軍」と
政権を朝廷に返還したが未だに日本最大の勢力持つ
徳川幕府、会津藩を中心とする「幕府軍」の戦いである

数では新政府軍を圧倒していた幕府軍だったが
終わってみれば一方的な戦いであつた

新政府軍の最新式の装備の前では「古い」幕府軍はあまりにも無力
だった

ここに一人の武士がいる

名は 秋月小次郎 あきつぎいしろう

この者の家系は代々幕府に仕えていたが祖父の代で
身分を剥奪されていた

しかし幕府への忠誠は失われておらず

上洛する将軍警護のために結成された「浪士組」に参加
上洛後に浪士組を私兵化しようとした清川八郎に反発し
京都に残留し「壬生浪士組」（後の新撰組）の隊士となる

その後局長である近藤勇、副長の土方歳三の下で数多くの
事件で活躍した

秋月小次郎も新撰組隊士して鳥羽・伏見の戦いに参戦し
奮戦したが一人の働きで戦況が覆るはずも無く
新撰組は敗走していった

「・・・皆、脱出したな」

秋月は一人で戦場だった場所に立っていた
多くの仲間を逃がすために自ら殿を買って出た
そして見事にその大役をはたしたのだった

「行こう・・・」

暗闇の中、小次郎は歩き出す

「この戦いが終わっても新撰組はまだある」

仲間の下へ

その時

銃声が響いた
体に痛みが走った
胸に穴が開いていた

それに気づいた時には
体が前に傾いていた・
・

ゝ序章ゝ（後書き）

白状すると√が決まっていな感じです
誤字、脱字、アドバイス、批判がありましたら
是非お願いします

主人公設定（前書き）

主人公である秋月小次郎の簡単な紹介

主人公設定

名前…秋月小次郎 あきつぎ こしろう

所属…新撰組 一番隊組長代理 ＊本作オリジナル設定

メイン武器…菊一文字則宗 病の悪化で療養中の沖田総司にお菓 らく子を差し入れた際に病で戦えないため自分の代わりにと秋月に託した

サブ武器1…脇差 主に相手に意表をつく時、刀で相手の体勢を崩した時の止めに使用されるが実際はメイン武器が破損した時の為の予備である

サブ武器2…鉄扇 武士の嗜み？ 攻撃力はゲーム中最低（力士の張り手より弱い）だが腐っても？鉄であるため日本刀の一撃にも耐える

性格…壬生浪士組結成当初はあまり感情を表に出さず冷たい印象を受けるが仲間意識はしっかり持っており総長である山南敬助の脱走の際は人一倍動揺し、その（間接的ではあるが）原因となった伊藤甲子太郎を油小路で殺害した時は怒りの感情を露にした

特殊能力？…何人切っても刀の切れ味が落ちない&折れない（原作準拠）

ある程度の怪我なら一晚（正座で）安静にすれば完治する（原作準拠）

防御に徹すれば（稀に）鉄砲の弾も防げる（原作準拠）

主人公設定（後書き）

Q 特殊能力がチートレベルなんだが

A 原作道理だからしかたない

誤字、脱字、アドバイス、批判がありましたら是非お願いします

第一話（前書き）

見切り発車感バリバリ

第一話

「此処は…何処だ」

目が覚めた秋月小次郎は混乱していた、自分は後ろから撃たれて倒れたはず…だった

だが今は自分は生きているし撃たれた傷もない
体中にあつた刀傷もなければ、ボロボロだった羽織も切れていない
そして極めつけは今が自分が立っている場所である

そこは何もない荒野だった本当に何も無かった
自分が最後に見たのは戦場になつた京の町並みだった

「此処は何処なんだ…」

もう一度言つたところで誰も答えない
頭ではわかつてはいるが言わずにはいれなかった

秋月小次郎は当ても無く歩いていて
あの場所に留まっても何も変わらないと決断したからだ

とにかく情報がほしかった
とにかく人に会いたかった

しばらく歩いた小次郎の前には望み通り人が現れた
しかし、その人間は人の心を忘れた外道であった

「ケケケ…兄ちゃん良いもん着てるじゃねえか…え？」

三人の中心にいたリーダー格の男が剣を片手に
下品な笑い声を出しながら問いかけてくる

「……族か」

「ま、そうゆうこと大人しく有り金全部渡してもらおうか、後その
剣も」

「断る」

「おいおい…大人しく言うこと聞けば命は助けてやるのに」
左の男も腰の剣を抜きながら近づいてくる

「あゝあ、お前さん死んだね」

右の男が腕を組んでもよさそうに喋る

（あまり手荒なことはしたくないが仕方ない…）

「族に渡すものなど何一つ持っていないだけだ…」

その言葉と同時に近づいてきた左の男を抜刀術で男の首を切りつける男の首が中に舞った：首を失った体は血を撒き散らしながらしばらく歩き倒れた

「や、野郎ーッ！　ぐふっ！」

リーダー格の男が慌てて剣を構えようとするのが遅かった
気づいたときには胸に刀が突き刺さった後だった

（あと一人…）

男の胸から刀を抜き最後の男向かって走る

「ままま、待ってくれ、許してくッ！…」

最後に残った男は
仲間が殺された恐怖から命乞いするが
言い終わる前にそのを命を散らした

刀に付いた血を払い鞘に戻した後に族の死体を見て
小次郎はある物に目を奪われた
族たちが持っていた「剣」に

（見たことのない形だ…）

小次郎がその剣を拾い上げようとした刹那

「その者、それ以上動くな！」

青い髪の女が弓矢こちらに向け立っていた

（油断した…）

小次郎そう思わずにはいられなかった

敵は全て倒したと勝手に思い刀をしまい警戒を解いてしまった

「貴様、名は何というんだ？」

女は大きくは無いがハッキリした口調で言ってきた

「…秋月小次郎」

こちらも負けずにハッキリと答える

よく見ると女の後ろにも数人、弓を構えた男達がいるのが見えた
だが男達は先ほどの族とは違いしつかりとした鎧を身に着けていた

「では秋月小次郎とやらお前の足元に転がってる死体はなんだ？」

「…え？」

「お前の足元にある死体はなんだと聞いている！」

（仲間じゃないのか…）

ここで互いに勘違いをしていると考えた小次郎は
弓を構えてる女の見据えて物怖じせずに答えた

「襲ってきた族を返り討ちにしたまでです」

「何、族だと？……調べて来い」

「「はっ！」「」」

「悪いが調べ終わるまで動かないでもらおう」

女は弓はまだこちらを向いていた

女に命じられた部下らしき男が死体を調べている間
重い沈黙が続いた：

第一話（後書き）

誤字、脱字、アドバイス、批判がありましたら
是非お願いします

第二話（前書き）

イメージを文に変換するのって難しい

第二話

「ふむ…どうやら、嘘ではないらしいな」

数十秒だったかあるいは数分にも感じられたが部下に耳打ちを受けた女性は言いながら弓を下ろした
どうやら誤解は解けたようだ

「いきなり弓を向けてすまなかった、改めて名前を聞かせてもらおう」

「秋月 小次郎…」

「姓はあき、名はつき、字はこじろう…か？」

「いえ、姓が秋月、名が小次郎で字というのはありません」

「ん？…字がない…」

そういうと女性は顎に手を当て考え込んでしまった
そこで小次郎はまだ女性の名を聞いてないことを思い出した

「あなたは？」

「ああ、失礼まだ名乗ってなかったな」

女性は顎から手を離しながら名乗る…

「姓は夏侯、名は淵、字は妙才…陳留の刺史をしている曹孟徳様に仕えてる将だ」

「え…？」

今度は女性の名を聞いた小次郎が考え込んでしまった

（夏侯淵妙才…陳留…刺史…曹孟徳…）

目の前にいる女性は確かに「夏侯淵妙才」と名乗ったそれは三国志において勇名を馳せる魏の猛将の名であっただが、目の前にいるのは女性である

自分の疑念を確かめるために小次郎は夏侯淵と名乗った女性に問う

「夏侯惇元讓…この名に覚えはありますか？」

「我が姉の名前だが…なぜその名を？」

「夏侯きよ…姉妹の武名は有名ですので」

「ふむ…」

夏侯淵の目には再び警戒の色が宿ってしまったが疑念がほぼ確信に変わった

（やはりこの者は夏侯淵妙才だ、しかし今確かに「姉」と言った夏侯惇も「女性」なのか）

「では、今度は私の質問に答えてもらおうか？」

「……………」

「おまえの所属・此処にいる訳…この二つだ」

小次郎は一つ一つ思い出すように話した

自分が日本の京都の治安維持部隊「新撰組」の隊士であること
大きな戦に参加して背後から「弓」で撃たれ致命傷を負ったこと
気づいたら荒野にいて、当ても無く歩いていたこと

（しかし、信じてはもらえないだろう）

小次郎はそう思った自分自身その事が信じられないのだから

「ふむ、俄かには信じがたいが…なるほどな」

そう言いながら夏侯淵はこっちを観察するかのような目で見てくる
心なしかその顔は微笑んでいるようだった

そのあとも夏侯淵の質問は続いた

「日本とは何処か？」、これには此処より東にある島国と言ったら
納得してもらった

「致命傷を負ったようには見えないが？」、これについては小次郎
本人も分からないと言うしか無かった

彼女はしばらく考える素振りを見せた後

小次郎に言った

「すまないが、私だけでは判断しかねる我が主の判断を仰ぎたいの

でその身を拘束させてもらう」

「…分かりました」

「拘束」この言葉に不安を覚えながら小次郎は抵抗は無駄と判断した
小次郎は自分の刀、脇差を彼女の部下に預け槍を持った兵士に囲ま
れながら歩き出した

「曹孟徳…三国志…これからどうなる？」

彼の問いに答える者はいない

第二話（後書き）

誤字・脱字・批判・アドバイスがありましたら
是非お願いします

第三話（前書き）

少し強引過ぎたかも…

第三話

「あなたが秋月小次郎かしら？」
玉座に座った少女が問いかける

「はい」

男は短く、ハッキリと答えた

秋月小次郎は驚いていた
目の前の少女「曹操 孟徳」に
その少女が発する覇気に：

「大体の事情は秋蘭から聞いたわ」

その言葉に小次郎は首を傾げる

「あなたを此処まで連れてきた夏侯淵のことよ」

「そうですか」

「・・・？、あなた真名という言葉知っているかしら？」

「いいえ、存じませんが…」

「そう・・・」

そう言いながら曹操は黙ってしまった
その目は「聞いてこい」と言っていた

「……………」

「……………」

沈黙が続く

「真名は持つものにとつての神聖な名で自分の認めた者にしか呼ぶ
ことを許されない特別な名前のことだ」

曹操の隣に立っていた夏侯淵がフォローする様に言う

「特別な名…ですか？」

「ああ、本人の承諾無しで真名を呼んだら殺されても文句は言えん、
それほど特別な物だ」

「そうですか…」

（なるほど、先程の「秋蘭」というのは夏侯淵殿の真名か…）

パンパンと手を叩く音が聞こえ

曹操が口を開く

「話を戻すわ、秋蘭から聞いたけどあなたは行く当てが無いんで

しょう？」

「ええ、目が覚めたら見ず知らずの地にいたので右も左もわかりません」

「そこで、此処で働いてみるつもりは無いかしら？」

小次郎の中の時が一瞬止まった

「…今なんと？」

「聞こえなかったの、此処で働いてみる気は無い？と聞いたのよ」

「しかし華琳様、連れてきた私が言えることではありませんが…」

「秋蘭…」

曹操が手をだし夏侯淵を制す

「…御意」

「さて、秋月小次郎…答えを聞かせてもらえるかしら？」

「……………」

小次郎は考える

この申し出を受けるか否か

自分の考えが正しければこの場所いやこの世界は自分が今まで生きていた所ではない

そして今の自分には頼れる当てが全くない

しかしだからといってこの申し出受けるのは徳川幕府に忠誠を誓っている自分自身の「武士」の在り方に反するのではないか：

「………」

「どうしたの？、早く答えてほしいのだけど」

「…一日だけ待ってもらえないでしょうか？」

小次郎は即答を避けた、考えることが多すぎる

直ぐには答えなど出なかった

それを聞いた曹操は目を閉じてしばらく考えた後に

小次郎を見ながら言った

「まあいいわ、今日のところはじっくり考えてもらって明日に答えを聞かせてもらうからその代わり答えを聞かせて貰うまでは部屋に軟禁それと貴方の武器はこちらで預からせてもらうわ」

「わかりました」

小次郎は要求を呑んでくれた曹操に頭を軽く下げて言う

「彼を客室に案内して部屋の前に監視も忘れないで」

「「はっ！」」

曹操が近くの兵に命令する

小次郎は前後を兵士に挟まれながら部屋を後にした

「秋月小次郎…この私を前にしてあの堂々した態度…」

「華琳様、なにか？」

「なんでもないわ…執務室に戻るから巡回の報告書を後で持ってきてちょうだい」

「御意…」

「秋月小次郎…」

執務室で夏侯淵の報告書と鞘に収まった刀を見ながらあの男の事を
思い出す

「日本…京都…新撰組…出鱈目な妄言かと思ったけど」

曹操は窓の外を見た
いつもと変わらない風景だったが何故か新鮮味があった

「おもしろい…」

その顔には笑みが浮かんでいた

第三話（後書き）

誤字・脱字・批判・アドバイスがありましたら
是非お願いします

第四話（前書き）

短い…

第四話

小次郎は兵に案内されある部屋の前に着いた

「では、用があれば部屋の前の者にお申し付けください」

「わかりました」

「では、私はこれで」

「一ついいですか」

「はあ…なんででしょうか？」

去ろうとした兵を小次郎は呼び止める

呼び止められた男は不思議そうな顔をして聞く

「曹操殿はどのような方なのですか？」

「そうですね…」

男は少し考えような素振りを見せた後答える

「曹操様は自分にも周りにも厳しいですが、民や部下の事を第一に考える心優しい方…：：：ですかね」

「そうですか、ありがとうございました」

「いえ、では私はこれで…」

「呼び止めて申し訳ありませんでした」

男に軽く頭を下げて小次郎は部屋に入った

部屋を見渡すと机が在りその前に椅子そして奥のほうに寝台があるがそれ以外は何もない殺風景な光景が広がっていた

（さて、どうしたものか）

小次郎は椅子に座り考えるいつもは座布団の上で正座が基本姿勢なので微妙な違和感を感じたが無視することにした

（まずは今の状況を整理するか）

自分は京都での戦で胸に銃弾を受け倒れたはずその時の痛みはまだ脳裏に焼きついている

そして気づいたら見覚えの無い荒野にいた普通に考えればありえないことだ

そして極めつけは「女性」の姿をした曹操と夏侯淵という三国志の英雄達

もしかしたら今見えているこの光景は夢なのではないか？そう思い手の甲を抓るが痛みはするが目は覚めることはなかった
では新撰組にいた頃の方が夢で今見えてるのが現実なのかと考えそうになったが自分が着ている羽織そして「誠」と彫られた額当てが

その可能性を否定していた

「分かっているのは、この世界が普通ではない…ということか」

次に小次郎は曹操について考えた

あの少女が発するとは思えない覇気あれはまさに英雄の覇気と言ってもいいだろう

正直な所あの少女仕えても良いのではないかと思っている自分がいる
曹操の誘いを断ればまたあの荒野を当ても無く彷徨うことになる
しかし、自分は徳川に忠誠を誓っている武士である

「武士とは一度仕えた主君を変えぬものだ」とは新撰組局長である
近藤勇の言葉だ

「私は……」

小次郎は決断出来ずにいた…

どれほどの時間が経っただろうか既に窓の外が暗くなっていた
小次郎が椅子から立ち上がろうとしたのとほぼ同時に扉の向こうから女性の声が聞こえた

「秋月様、お食事をお持ちしました」

「……どうぞ」

「失礼します」

入ってきたのは侍女の格好した女性であった歳は十代後半辺りだろうか…

女性が机の上に料理を並べ終わった後小次郎は彼女にも曹操のことを聞くことにした

「一つ聞きたいことがあるのですが…」

「はい、私に分かる事であれば…」

「曹操殿はどのような方なのですか」

「曹操様は私の命の恩人です」

彼女は胸をはって答えた

「命の恩人？」

「はい、私は少し前までこの近くの村に住んでいました…」

彼女は話すある日突然村に族がやってきたこと

そして曹操率いる軍隊が族を倒し村を守った事を…

彼女は目を輝かせながら話した

「私は曹操様に恩返しをしたい…そう思いここで働かせてもらっているんです」

「そうですか…」

「あ……」

そこで女性は何かに気づいたように頭を下げ始めた

「す、すみません長々と話してしまって…」

「いえ、お気になさらず」

「で、では後で食器を片付けに来ますので…」

そう言うとき女性はそそくさを出て行ってしまった

小次郎は運ばれてきた食事を口に運びながら再び曹操について考えた

（自分にも周りにも厳しいですが、民や部下の事を第一に考える心優しい方）

（曹操様は私の命の恩人です）

「忠誠は誓えない……だが」

小次郎は決断した

この決断が秋月小次郎にそして曹 孟徳にどのような結果をもたらすか誰にも分からない

第四話（後書き）

ちなみに作者にも分からない
誤字・脱字・批判・アドバイスがありましたら
是非お願いします

第五話（前書き）

小次郎が御熱い人になってしまった…

第五話

「・・・朝か」

目が覚めた小次郎は上半身だけ起こし周りを見たが殺風景な風景は変わっていないかった

「はぁ…」と小さな溜め息が出た、どうやら自分はこの世界を自分の夢だという可能性を捨て切れていなかったらしい

寝台から降りた小次郎は椅子の背もたれに掛けてあった羽織と机の上に置いてあった額当てと籠手を身につけた

暫くしてから部屋に夏侯淵が入ってきた

「秋月、準備は出来ているか？」

「はい」

「そうか…では案内しよう」

そう言いつつ夏侯淵は歩き出し小次郎はその背中を追う

昨日の曹操と面会した部屋と方向が違うことに気づいた小次郎が問う

「何処に向かっているんですか？」

「ああ、言っていなかったな…」

小次郎の問いに夏侯淵は答える

「実は我が姉の夏侯惇がおまえの仕官に反対してな…腕前を見たいらしい」

「なるほど…」

「なので、先日のお部屋ではなく外の調練場で二人とも待っている」

調練場に付くと曹操の姿が見えたその隣で黒髪の女性が殺気を出している彼女が夏侯惇であることが想像できた

「華琳様、お連れしました」

「ご苦労様 秋蘭」

曹操が夏侯淵に労いの言葉をかけた後に小次郎を見ながら言う

「秋月小次郎、昨日の答え…聞かせてくれるかしら」

「…お受けいたします、しかし」

「しかし？」

「客将として曹操殿にお仕えさせていただきます」

「客将…ね」

「はい」

「理由を聞かせてもらえるかしら」

「私は既に徳川に忠誠を誓っています、なので貴方に忠誠を誓うことはできません」

そこまで言ったところで夏侯惇が声を荒げる

「貴様あ！、主君になる華琳様に忠誠を誓えないとはどうゆうことだ！！」

「春蘭、少し静かにしてちょうだい」

「しかし、華琳様…」

「春蘭…」

「……分かりました」

夏侯惇が一步下がる、その目は若干潤んでいた

「まあいいわ、客将の条件は受け入れましょう」

「感謝します」

「そのかわり、秋蘭から聞いているけど貴方の武勇を試させてもらうわ」

「その内容は？」

曹操が右手を上げると後ろに居た兵がこちらに走ってきた、その手

には剣が握られていた

「春蘭の隊から精鋭を五人用意したから彼らと戦ってもらうわ」

「わかりました」

「今回はこちらの用意した武器で戦ってもらうから…」

すると夏侯惇が此方に剣を投げてきた

それはこの世界で何度も見てきた両刃の剣であった

それを手に取り数回振ってみたが不思議にも違和感は感じなかった

「それは所謂 刃を潰してある訓練用…切れはしないけど下手をすれば骨は折れるわ」

「分かりました」

「では、始めてもらいましょうか」

そう言うとき曹操は訓練場に置いてあった椅子に腰掛けた

小次郎は兵の指示に従い訓練場の中央に移動して剣を構えた

「春蘭、どう思う？」

「はっ！ 我が隊の精鋭があんな何処の馬の骨ともわからない奴に負ける訳がありません」

「秋蘭はどうかしら…」

「秋月が勝つかと…」

「根拠は…」

「武人の勘…としか言いようがありません」

「そう…」

その会話を最後に三人の視点は調練場の中央に集中した

小次郎の前に一人の男が剣を構えているその顔には絶対の自信が浮かんでいた

「やあー！ー！！」

男が間合いを一気に詰め剣を振り下ろす

「はっ！」

小次郎はその一撃を左に受け流しながら体を右に滑らす
そして体勢を崩した男の首筋に剣を振り下ろして寸前のところで止めた

「ま、参りました・・・」

男は項垂れながら自分の敗北を認めた

「…次の方、お願いします」

小次郎は後ろで待機していた兵を見ながら言う

二人目の男が向かってくる先程の男とは違い剣を低く構えていた

（切り上げか…）

小次郎の読みどおり男は下から剣を振り上げようとするが…

それを小次郎が右手に持った剣で防ぎ空いた左手の掌底で顎をかち上げる

「ぎゃー!!」

という悲鳴を上げて男は地面に大の字で倒れ意識を失った

この後も三人が小次郎に向かっていくが攻撃を受け流され体勢を崩したところを打たれるという展開が続いた

「文句なしの合格ね…」

その言葉に小次郎が振り返ると笑みを浮かべた曹操と夏侯淵そしてなんともいえない表情をした夏侯惇の姿があった

小次郎は曹操に頭を下げながら次の言葉を待った

「それにしても…」

曹操が悪戯をする子供のような目で夏侯惇のほうを見ながら言う：

「我が隊の精銳があんな何処の馬の骨ともわからない奴に負ける訳がありません：だったかしら？」

「いえ：その：」

「しゅ・ん・ら・ん」

「も、申し訳ございませんゝ華琳様」

夏侯惇は必死に許しを請う

「春蘭：あなたに名誉挽回の機会を与えるわ」

「はい、華琳様」

曹操は今度は小次郎の方を見ながら言う

「小次郎と戦い、見事に打ち負かせなさい」

「はい？」

「分かりました華琳様、すぐに準備してまいります」

「え：」

「どうしてこうなった…」

「覚悟しろ、秋月小次郎――！！」

調練場の中央で小次郎がぼやく、その前で夏侯惇が女性が扱えとは思えないほどの大剣を持ちながら叫んでいる

「覚悟を決めるか…」

小次郎は剣を正眼に構える

「では、こちらから行くぞ！」

そう叫ぶと大剣も待ってるとは思えない速さで突っ込んでくる夏侯惇
小次郎はそれを受け流そうとするが…

（まずい…！！）

本能が危険と判断し後方に跳んで避けること選んだ
結果的にはこの行動は正解だった大剣が振り下ろされた所には大きな窪みができていた

「まだまだ――！！」

そういうながら夏侯惇は大剣を胴めがけ横に払う
小次郎は剣の横腹で受け止めようとするが威力を殺しきれずに数メートル吹っ飛ばされてしまった

「ここまでとは…」

「どうした、そんなことでは私には勝てぬぞ」

「…では今度はこちらからいきます」

「いいだろう、来い」

小次郎が剣を構えて夏侯惇に近づき剣を寝かせ突く

小次郎の突きは新撰組一番隊組長である沖田総司と同等の速さを持つ

「はっ！ はっ！ はっ！」

「ぐっ、やるな…だが！」

夏侯惇は大剣を横にし盾のように使い小次郎の攻撃を防ぎ攻撃が止んだらそのまま足払いのように大剣を払う

小次郎はそれを上に跳んでかわしその勢いそのままに剣を振り下ろすが夏侯惇の大剣に阻まれ防がれるお互いの剣から火花が飛び散った一進一退の攻防が続く訓練場にいた全ての人間が固唾を吞んで見つめていた

どれ程打ち合っただろうか二人は既に肩で息をしていた…いや夏侯惇の方が僅かだが余裕の表情をしていた

「ここまで、私を追い詰めたのはお前が始めてだ…」

「夏侯惇殿にそう言われるのは光栄です…」

すると夏侯惇の顔がより真剣なものとなった

「春蘭だ…」

「え・・・」

「私の真名だ…」

「春蘭…」

「そうだ」

春蘭は満足そうに頷く

「秋月小次郎…次で最後にしよう」

「分かりました…」

互いに剣を構え直し、じわじわと距離を詰める

「夏侯 元讓…」

「秋月 小次郎…」

「「参る！」」

互いの全力の一撃が交差した
そして勝敗が決した

小次郎の剣が後方の地に刺さり

春蘭の剣が小次郎の肩の上に置かれていた

「私の勝ちだな…」

「ええ…そうですね」

「二人ともご苦労様…」

曹操が手を叩きながら歩いてくる

「春蘭…よくやったわ」

「はい、華琳様」

春蘭が満面の笑みを浮かべて答える

「小次郎…」

「はっ」

「貴方もよくやってくれたわ」

「ありがとうございます…」

「では、春蘭…改めて聞くけど小次郎の仕官は反対かしら？」

「いえ…」

春蘭は首を振る

それを聞いて曹操は満足そうに頷きながら
小次郎を言った

「秋月小次郎！、貴方を我が軍に迎えるわ・・・客将としてだけど
ね」

曹操の言葉に小次郎は頭を下げて答える

「貴方には先ず三つの事をしてもらうわ」

曹操は指を三本立てながら言う

一つ目は町の警邏をして町の構造を覚えること

二つ目は最低限の読み書きが出来るようにすること

三つ目は春蘭の隊の調練に参加して春蘭の鍛錬相手になり互いに高
めあうこと

「では、改めて名乗らせてもらうわ…」

曹操は堂々とした態度で言う

「我が名は曹操 字は孟徳…そして我が真名は華琳…春蘭が認めた
者なら私の真名も預けよう」

夏侯淵もそれに続く

「我が名は夏侯淵 字は妙才 真名は秋蘭…秋月これからは華淋様の為に共に戦おうぞ」

小次郎は片膝をつきながらはつきりとした口調で言った

「秋月 小次郎 これからお世話になります…」

第五話（後書き）

誤字・脱字・批判・アドバイスがありましたら
是非お願いします

第六話（前書き）

番外編で秋月小次郎の一日を書こうとしたけど台詞が全くでなかったのでお蔵入り

原作という名のレール道理進むと面白みが無い、無視する脱線の危険
むむむ・・・

第六話

秋月小次郎は人を探していた…

華琳（伝えにきたのは春蘭だが）に遠征軍にとって重要な糧食の帳簿を監査官から貰ってくるように命じられたからである

しかし、小次郎はその監査官の名前と顔を知らないため難儀していた
小次郎は近くにいた被り物をした少女に聞くことにした

「もし…」

「……………」

少女は聞こえなかったのか小次郎の言葉に反応しなかった

「もし…」

「聞こえてるわよ！　うるさいわね！」

少女がいきなり怒り出すどうやら聞こえていなかったのではなくあえて無視していた様だ

「監察官を探しているのですが…」

「あら、私に用があるの」

「貴方が監察官ですか、私は…」

「何よ、用があるなら早く言いなさいよ」

「…華琳殿から糧食の帳簿を貰ってくるように言われてるのですが」
その言葉を聞いて少女が声を荒げ詰め寄ってくる

「な、なんであんたが曹操様を真名で呼んでるのよ！、もし聞かれ
たら打ち首よ！」

「華琳殿から許可を得たから…としか言いようがありませんが」

「…浅葱色の羽織とその額当て…あんたが秋月小次郎ね？」

「そうですが…」

そして近くの机を指さしながら少女は言う

「帳簿ならそこにあるから勝手に持って行きなさい」

「分かりました…」

小次郎が去る間際に後ろから少女の「なんであんな奴が曹操様の真
名を…」と恨み節が聞こえたような気がしたが無視することにした

「華琳殿、帳簿を持ってまいりました」

「少し遅いような気がするけど…まあいいわ」

華琳が帳簿に目を通すがその顔は次第に怒りの表情に変わっていった

「小次郎…」

「はっ」

「この帳簿を見て気づくことは無いかしら？」

小次郎が華琳から帳簿を受け取り読み上げていく

「…糧食が少し…いえ、かなり少ないと思いますが」

「でしょうね、私の指示の半分しかないもの…」

「半分…ですか」

小次郎は啞然とした粗食が本来の半分しかない、それは遠征の途中で食料が尽き軍全員が飢え死にしかねないからだ

「秋蘭…すぐにその監査官を此処に連れてきなさい」

「はっ」

そう言うとき秋蘭は足早に去っていき

怒りの表情の華琳と気まずそうな顔をした春蘭と小次郎が残された

「それにしても、本来の半分しか用意できなかったとはその監査官は余程の無能なのか？」

「春蘭殿、半分ということを考えると”しなかった”と考えたほうが自然です」

「そんなことをして何になるんだ」

「さあ、本人聞くしか…」

暫くして秋蘭があゝの監査官の少女を引き連れて戻ってきた

「華琳様、連れて参りました」

華琳が少女を睨み付ける

「お前が食料の調達を？」

「はい、必要十分な量を用意しましたが…何か問題でもありましたでしょうか？」

少女はあっけらかんに言う

「指示した量の半分しか用意していないのによく言うわ、このまま出撃していたら行き倒れになるところだったわ」

「いえ、そうはならないはずです」

「なに？ ……どういう事かしら？」

「理由は三つあります、お聞きいただけますか？」

「……説明しなさい、納得のいく理由なら許してあげてもいいわ…」

「…ご納得いただければ、それは私が不能のいたす所…この場で我が首を刎ねていただいても結構でございます」

「…二言はないぞ？」

「はっ、では…」

少女が臆する様子無く堂々と説明し始める

一つ目は曹操が用心深い性格なので確認しないで出撃して行き倒れになる心配は無い
というものだった、これを聞いた華琳は自分が試された事に怒り春蘭に少女の首を刎ねる様に命じるが小次郎と秋蘭が説得し事なきを得た

二つ目は糧食を少なくする事で部隊を身軽にし行軍速度をを上げ討伐行全体にかかる時間を短縮出来る…だが

「なあ、秋月」

「何ですか？」

「行軍速度が速くなっても、討伐の時間までは早くならない…よな？」

「そうですね」

「良かった、私の頭が悪くなったのかと思ったぞ」

「……良かったですね」

「ん、なんだ今の間は？」

「……………」

「目を逸らすな！」

そう、いくら行軍速度を上げても討伐に時間をかけてしまったら粗食が足りなくなり華琳の言う通り行き倒れになってしまう

そして三つ目は少女の提案する作戦を用いれば戦闘時間は短くなり現在の粗食の量で十分というものだった
そして少女は華琳に自分を軍師にするように願い出た

「曹操様！ この荀？めを曹操様を勝利に導く軍師として、麾下にお加えくださいませ！」

「「……………」なっ！？」」

「……………」

これには小次郎・春蘭・秋蘭の三人は驚きの声を上げた最も小次郎は彼女の名前に驚いているのだが、しかし華琳は無言で荀？を見つめている

「どうか！ どうか！ 曹操様！」

荀？は必死に頼み込み土下座しそうな勢いで頭を下げる
そして華琳は荀？に問いかける

「…荀？、貴方の真名は？」

「桂花にございます」

「桂花、あなた…この曹操を試したのね」

「はい」

「桂花、軍師としての経験は」

「はっ、ここに来るまでは南皮で軍師をしていました」

「…そう」

聞き慣れぬ地名を聞き小次郎は隣にいた秋蘭に聞く

「南皮とは？」

「南皮はここより北にある袁紹の本拠地で、袁紹というのは華琳様とは昔から腐れ縁でな…」

「なるほど」

そこまで聞き華琳と桂花に視線を戻す

丁度その時、華琳が桂花の視線を離さずに春蘭の方に手を伸ばす

「春蘭」

「はっ」

華琳が春蘭から愛用の大鎌を受け取り桂花に向けて構える

「華琳様…っ！」

秋蘭が必死に止めようとするが華琳は聞かない

「桂花、私がこの世で尤も腹立たしく思うことは他人に試されるということ…：分かってるかしら？」

「はっ、そこをあえて試させていただきました」

「そう…：ならば、こうする事もあなたの手のひらの上という事ね…」

そう言いつつ華琳は桂花の首に大鎌を振り下ろす

(まずい…：)

小次郎が堪らず飛び出そうとするが水平に出された春蘭の腕に阻まれる

小次郎は春蘭を睨みつけるが彼女の顔には笑みが浮かんでいた

小次郎が桂花を見ると彼女の首はまだ胴体と繋がっており、血も出ていなかった

「寸止め…」

小次郎が言う

「まあ、そういうことだ」

春蘭が小さく笑いながらそれに答えた

「分かっていたんですね…」

「当たり前だ、私とお前では華琳様の配下として年季が違うからな」

「ということは、秋蘭殿も…」

小次郎が視線を向けると

秋蘭の方も微笑みながら頷いていた

「当然でしょう…」

華琳は小次郎の方に視線を移した後、再び桂花の方を向く

「けれど桂花、もし私が本当に振り下ろしてたら、どうするつもりだった？」

「それが天命と受け入れておりました、天を取る器に看取られるなら、それを誇りこそすれ、恨むことなどございませぬ」

桂花は頬を朱に染めながら言うが対する華琳は冷たい表情だ

「…嘘は嫌いよ、本当の事を言いなさい」

「曹操様のご気性からして、試されたならば必ず試し返すに違いないと思いましたが、避ける気など毛頭ありませんでした」

それに自分は文官であって武官ではないから防ぐ術は無いと彼女は続ける

「…ふふっ、あはははははっ！」

華琳は大声で笑う

暫く笑った後に桂花を見つめながら言う

「最高よ、桂花：私を二度も試す度胸とその知謀、気に入ったわ
あなたの才、私が天下を取るために存分に使わせてもらおう事にする、
いいわね？」

「はっ！」

「ならまずは、この討伐行を成功させてみせなさい、粗食は半分で
いいと言ったのだから：もし不足したならその失態、身をもって償
ってもらおうわよ？」

「御意！」

こうして曹操軍に新たな軍師が加わった

————————————————————

「まったく、貴方は客将とはいえ私の配下なんだから演技くらい見
抜いて欲しかったわ」

馬に跨りながら華琳は小次郎に苦言を呈する

「申し訳ありません！」

「そうよ！ あんな演技も見抜けないなんてやっぱりあんたは華琳
様に相応しくないわ！」

華琳を挟んで逆側にいる桂花も続く

「桂花殿、先程は足が震えていましたよ…」

「なっ!!」

思わぬ反撃に遭い思わず絶句してしまう

「ええ、確かに震えてたわね」

「な、華琳様まで…」

「それに、”あんな”演技とは言ってくれるわね桂花…」

「あ…も、申し訳ありません!」

「帰ってたら…覚えておきなさい…」

怒りで顔を引きつらせながら笑う華琳と必死の謝罪をする桂花を見ていた小次郎が俯きながら肩を震わした

「な、秋月小次郎! 何を笑っているの!」

「桂花…」

「はい! 申し訳ございません華琳さま」

（最近、自然に笑う様になったな…）

小次郎はそう思い空を見上げる…その日は快晴で見事な浅葱色の空が広がっていた

第六話（後書き）

なんやかんやあって〜なんやかんやあって〜
誤字・脱字・批判・アドバイスがありましたら
是非お願いします

第七話（前書き）

試験的に○○視点を導入してみました
これで何か変わればいいのだが：

第七話

秋月小次郎は属する曹操軍は休憩を挟みつつ進軍を続けていた
その移動速度は粗食が半分にした割には少し速い程度だった

それから暫く進んだところで斥候から前方に大人数の集団が居ると
の報告があり全員に集合の命が下った

「来たわね…」

華琳が四人を見ながら言う

斥候の報告によると前方の集団は数十人程で旗を掲げてなく格好に
統一性の無いことから族の可能性が高いというものだった

「様子を見るべきかしら…」

華琳は軍師である桂花を見ながら言う

桂花は少し考える素振りを見せた後

もう一度偵察隊を出すという結論を出し、華琳はその進言を取り入
れた

「では、もう一度偵察隊を出すから指揮は…春蘭と小次郎に頼もう
かしら」

「はっ」

「了解しました（押さえ役か…）」

春蘭隊と小次郎が偵察として本隊より先行していると前方に集団を視認できた

大きな音が響いたと思うと族と思われる男数人が空を舞っていた

「戦闘：ですかね」

「そのようだな」

「人が飛んでますね…」

「飛んでいるな…」

「報告します！ 族と一人の子供が戦っています！」

「なんだと！？」

その報告を聞くと春蘭は馬を走らせた

小次郎が制止の声を上げるが春蘭は聞かない

小次郎は残る春蘭隊に指示を出す

「すぐに曹操殿に報告を」

「はっ！」

「その二人は私と共に撤退した族を追跡し拠点の所在をつかみま
す」

「はっ！」

「残りは夏侯惇將軍に後を追ってください、決して追撃はさせない
ように」

――――

夏侯 元讓は怒りに身を任せ大剣を振るっていた
一人の少女に対して族は大人数で囲み戦っていた
武人の誇りを持つ者として到底許せるものではなかった

「貴様らー！、一人たりとも逃がさんぞ！」

思わず大声をあげて族を睨み付ける
それは族の戦意を無くすのに十分なものであった

「ば、化け物だ！ 逃げろーっ！」

「逃がすかぁ！」

「いけません、將軍！」

逃げる族を追おうとするが部下に制止される

「なぜ止める!？」

「秋月様の指示です」

「秋月の…だと？」

「はっ!、逃げる敵を追跡し拠点の場所を…と」

「むう…それならば仕方ない」

あいつの指示に従うのは少し癪だが納得することにし大剣を下ろし少女に近づく疲労の色がみえるが目立つ怪我はなかった

「怪我は無いか？」

「はい…助けてくれてありがとうございます!」

「それは良かった」

それを聞いて自然と安堵の表情が浮かぶ
そして少女に問う

「しかし、なぜこんな所で一人で戦ってたのだ?…偶然私がいたからいいものの」

「それは・・・」

少女が訳を話そうとした時に華琳様の本隊がその場に到着した

「春蘭、報告は聞いたけど…族はどうしたの?」

「はい、華琳様…族は撃退し秋月がその後を尾行しています」

「そう…」

華琳様の後ろで桂花が「部下に任せればいいのに…」とぼやいていたが皆聞き流していた

「あ、あなた…」

その時少女が華琳様を見ながら言う
それに華琳様は気づく

「あら、この子が報告にあった…」

どうやら既に少女の事は華琳様のお耳に入っていたようだ

「お姉さん、もしかして国の軍隊？」

少女は今度は私に問いかけてくる

「一応、そうなるが…」

そこまで言ったところで少女が鉄球を投げつけてきたので咄嗟に防ぐ
我ながら良く受け止められたと思うほど重い一撃だった…

「何をする!!」

思わず怒鳴り声を出す

「国の軍隊なんか信用できるかあ！、僕たちを守ってくれないクセに税金ばかり取るくせに！」

少女は涙を流しながら鉄球を振り下ろす、

「ぐっ！！」

気が進まないがこのまま殺されてやるほど私はお人好しではないので剣を構えるが…

「二人とも剣を引きなさい！！」

「は…はいっ！」

華琳様の声で我に返り剣を下ろす、少女もまたその迫力に負け武器を下ろしていた

「あなた…名前は？」

「許緒…です」

華琳様は少女の名前を聞き、そして…

「許緒、ごめんなさい」

少女に頭を下げた

「え…」

これには許緒と名乗った少女も呆気にと取られていた

「私は曹操、山向こうの陳留で刺史をしているわ」

「山向こうの…あ…ご、ごめんなさい」

今度は許緒が華琳様に頭を下げ謝罪した

――――

許緒は後悔した、山向こうの町の刺史の噂は山を挟んで此方にも聞こえてくる

曰く、悪政が全く無い

曰く、税金が安くなった

曰く、盗賊の数も減った

曰く、無類の女好き

一部を除いて刺史として立派なものであった…

そのような人達に武器を向けてしまった…

そんな自分が許せなかった…

しかし目の前の女の人は自分を許し手を差し伸べてくれた

「貴方の力を貸してくれないかしら？」…と

嬉しかった、こんなに素晴らしい人が自分を欲してくれるということに

そして約束してくれた…

いずれは大陸の王になり全ての人が安全に暮らせるようにすると：

許緒は差し出された手をゆっくりと握り笑顔でそれに答えた

「これからよろしくね、許緒」

目の前の笑顔を一生忘れることは無いだろう：

許緒はそう思った

その後ろから男の人の声が聞こえた

「華琳殿、只今戻りました」

その声をした方に顔を向けると水色の羽織を着た男の人がこちらに歩いてきた

――――

秋月小次郎は追跡により判明した賊の拠点の場所を報告した
報告を受けた華琳はその拠点に軍を向かわせた

その途中に許緒との自己紹介も済ませた

許緒の真名は季衣と言った

その際、季衣は小次郎のことを兄っぽいということで「兄ちゃん」と読んだ、これには小次郎が難色を示したが季衣の熱意しつこさと華琳の「いいじゃない、呼び方くらい」の一言で折れた

そして現在、曹操軍は賊の拠点近くで軍儀が行われ桂花の策が話さ

れている

桂花の策は先ず華琳率いる本隊、春蘭と秋蘭率いる別働隊に別れ本隊が敵を引きつけながら後退し敵の背後を別働隊が痛撃を与えるというものだったが春蘭が異議を唱えた

「そんな、華琳様を囚にするような策…認められるものか！」

「あら、あなたには他にこの策以上の妙案があるのかしら？」

桂花が挑発するように言うとき春蘭がだした案は”真正面から力で叩き潰す”というものだったが満場一致で却下され小次郎と季衣を華琳の護衛にまわすことで渋々であるが了承した

「では、作戦を開始する！ 各員持ち場に着け！」

「「はっ！」」

華琳の言葉と共に皆散っていった

秋月小次郎 曹操軍としての初陣が今始まろうとしていた

第七話（後書き）

誤字・脱字・批判・アドバイスがありましたら
是非お願いします

第八話（前書き）

戦闘シーン中心の筈が会話シーンがメインに…

第八話

秋月小次郎は戦を前に精神を集中させていたが季衣に話しかけられたことによりそれをやめた

「兄ちゃん、ちょっといいかな…」

「季衣殿、どうかしましたか」

「戦なんて初めてだから緊張しちゃって…迷惑だった？」

「いえ、そんなことはないですよ」

そう言いつつ小次郎は片膝をつき季衣に目線を合わせる

「誰にだって初めはあります、緊張するのも当然です」

「兄ちゃんは戦…したことがあるの？」

「ええ、戦は曹操軍に仕官する前に二度程経験しました…」

小次郎は思い出す、京に長州軍が進行してきた「禁門の変」そして”この世界”に来る直前の「鳥羽・伏見の戦い」を、どちらも多くの犠牲がでた禁門の変では京の町に火を放たれ鳥羽・伏見では多くの仲間が散った…

本来なら自分も鳥羽・伏見の戦場で胸を撃たれて死んだはずなのだが、何故か生きながらえて少女の姿をした三国志の英雄に仕え再び戦場で刀を振るおうとしている…そう考えるとやはり夢を見ている気分になる

「…ちゃん、兄ちゃんてばっ！」

「え…」

季衣が心配そうな顔をして呼びかけてくる、どうやら思い耽っていた様だ

「大丈夫？、顔色が悪いけど…」

「心配いりませんよ」

そう言って小次郎は季衣の頭に手を置き優しくなでる

（こうゆう事は沖田さんのする事なんだがな…）

小次郎は子供好きと公言していた同志であり親友であった人物を思い出す

「兄ちゃん、最後に一つだけ聞いていい？」

小次郎は頭から手を離し聞く姿勢をとる、季衣がこれまでに無いほど真剣な顔をしていたからだ…

「兄ちゃんは何のために戦っているの？」

そのあまりにも子供離れした質問に少し驚きつつも顔色を変えずに小次郎は答える

「仕える主君のため……だったのですが今は少し違います」

「違うの？」

「今は単純に”仲間を守る”ために戦う、そう決めました」

「仲間を…守る」

「季衣殿は何のために戦うのですか？」

小次郎の問いに季衣は笑顔で宣言する

「ボクも…ボクも仲間を守るために戦う、華琳様も春蘭様も兄ちゃんもみんなを守るために戦う！」

そこでもう一度だけ季衣の頭をなでる

「頼りにしていますよ、季衣殿」

「うん！」

そこまで話した所で本陣から銅鑼の音が響いた、作戦開始の合図だ

「始まりますね、大丈夫ですか？」

小次郎が抜刀しながら季衣に問いかける

「うん、もう大丈夫！」

季衣は巨大な鉄球のついた鎖を握り締め大きな声で答えた

— — — — —

桂花は戸惑っていた、いや呆れ果てていたの方が正しいかもしれない
本陣で銅鑼を鳴らすのは二つの意味がある
一つは離れている別働隊に作戦の開始を知らせる為
もう一つは族を挑発し砦から誘き出すためであるが…

銅鑼の音が響く

族の咆哮が響く

銅鑼の音が響く

族の咆哮が響く

どうやら族は銅鑼の音を自分たちの出陣の合図と思ったらしい…

「・・・桂花」

「はい、華琳様」

「これも策の内かしら」

「いえ…ここまで族が低脳だったとは…」

「ハア……いいわ、一応作戦通りだし」

華琳様は大鎌を掲げ兵に命ずる

「全員これより敵を迎撃しつつ後退する！
無駄に命を散らすでないぞ！！」

その声に周りの兵が大声で答える

後は別働隊がうまくやれば私の策は成就する

秋蘭が猪武者を抑えてくれさえすれば

[illegible]

秋月小次郎と季衣は本隊の前曲で敵と交戦していた

しかし思いのほか苦戦を強いられていた、部隊を分けたことによる数により不利もそうだが彼らは敵の攻撃をいなしながら後退しなければならぬ「攻撃と後退」という正反対の動きを同時にしなければならなかった

「はっ！」

「おやう！」

また一人敵を切る、その後ろからまた敵が来るので切る、その又後ろから敵が：

「おりやああああ！」

「まだだ」

「敵の無防備な横腹が見えてるのに……」

「敵に痛撃を与えたいなら背後からに奇襲が定石だからな……」

「まだか……」

「もう少し…」

「敵の最後尾だぞ！」

「よし、
いいぞ姉者」

「よし夏侯惇隊、攻撃用意！」

「夏侯淵隊、敵中央に向け一斉射撃！ 放て！」

「夏侯惇隊、突撃——！！」

猛虎が族を背後から噛み付こうとしていた

[illegible]

別働隊の奇襲により族は大混乱に陥り、撤退を始めるものの夏侯惇隊の猛烈な追撃を受け壊滅的な被害を出し敗走した

族に対し曹操軍は負傷者は出たものの死者の数は皆無であった

曹操軍は見事にこの討伐行を成功させたのだが……
その帰り道、華琳の居城が見えてきた時の事である

「古書……ですか」

「太平要術……あの族共がもっていると情報があつてね今回の遠征の
目的の一つだったのよ……」

「無かったのですね……」

「族に薪にされたか、落城する時に燃えたか……」

「すでに持ち出されたか……」

「その可能性もあるわね……」

後にこの「太平要術」が大陸全土を巻き込む騒乱の火種になること
は小次郎にも華琳にも想像出来なかった

「まあ、変わりに桂花と季衣という得難い宝が手に入ったから良し
としましょう」

「季衣殿も正式に我が軍に？」

「そうだよー」

季衣が小次郎の問いに答える
因みに季衣は小次郎と同じ馬に乗っている、俗に言う2けつである

華琳がいうには季衣の村を治めていた州牧が族を恐れて民を置いて逃げ出した為、華琳がその後を引き継ぐことになって季衣も華琳の親衛隊を任せることになったらしい

「季衣殿、よかったですね」

「えへへ」

「…貴方達、いつの間にそんなに仲良くなったの？」

華琳の問いに季衣が答える

「戦の少し前に兄ちゃんから戦う理由を覚えてもらったんです」

「それは？」

「仲間を守るために戦う…です」

「へー、小次郎がそんなことを…」

華琳はニヤニヤしながら小次郎を見る

「……なんですか？」

「意外に仲間想いなね…」

「……………」

「あはは、兄ちゃん照れてる」

「照れてなどいませんよ…」

そこまで言った時だった

ぐうぐうぐうという音が後ろから聞こえてきた

音の正体は季衣の腹の虫だった

「あはは…ごめんなさい」

「いえ、朝食を抜いているから気にすることは無いわ…ねえ、桂花？」

「……はい」

桂花の表情は暗い、それもそのはず大口たたいて半分減らした粗食が昨日の晩に尽きたのである

それによりここにいる全員が朝食をとっていないのだ

「しかし、華琳様これはそもそも季衣が粗食を一度に十人分も食べるからであって…」

「季衣殿は兵十人分の働きをしていますので、十人分食べる資格があると思いますが？」

「な、秋月小次郎！！ あんたは黙っていなさい！」

「桂花、不測の事態を予想できない軍師は無能と同じだと私は思うのだけど？」

「か、華琳様」

「ふふ、とは言え…今回の遠征の功績も無視できないわ」

そこまで言って華琳は桂花に微笑む

「首は刎ねないから、城に着いたら私の部屋に來なさい…たっぷりお仕置きしてあげるから」

「は、はい」

桂花は今にも昇天しそうな顔で答える

「ねえねえ、兄ちゃん…どうして桂花お仕置き受けるのに嬉しそうなの？」

「……季衣殿はまだ知らなくていいことです」

「え、それってどうゆう…」

「それより季衣殿、帰ったら食堂に案内しましょう」

「わーい、やったー！」

「はあ…」

こうして大きな戦果をあげることが無かったが秋月小次郎の曹操軍としての初陣は終わった

「仲間と共に無事に帰る」これが小次郎の中で最大の戦果である

だが、小次郎には心残りがあった

それは残してきた新撰組、そして本来の仲間であった人々は無事なのだろうか…と

第八話（後書き）

今回は一刀十桃園三姉妹との遭遇か、魏の三羽烏にしようか悩み中
それより先に黄巾イベントがあった

誤字・脱字・批判・アドバイスがありましたら
是非お願いします

第九話（前書き）

「オリジナリティ出したかったら一刀と違うことすればいい」と考
えこんな話になりました

第九話

「華琳殿、この度は正式に州牧への就任…おめでとうございます」

「はい、ありがとうございます」

秋月小次郎は自室で簡単な書類整理をしている途中で華琳に執務室に呼び出された

ちなみに華琳は今まで州牧代行だったが桂花の袁紹の下で軍師をしていた際に得た中央への繋がりなどを利用し正式に州牧になることが決定した

「それで、何か問題でも？」

小次郎は机を挟んで華琳の前に立つ

「明日の予定は覚えてるかしら」

「新たに傘下に加わった町の巡察…でしたね」

「その事なんだけど…」

「何かあったんですか？」

「ええ、実はその町の近くの寺院跡地にこの前討伐した族の残党が潜んでる情報があってね…」

「規模は…どのくらいのですか？」

「約三十人：数は少ないのだけど町の近くだから無視できないのよ」

「それで、私を呼んだと」

「ええ、貴方には季衣の部隊と共にこの残党共を鎮圧してもらうわ」

「季衣殿ですか…」

「本人が言い出して聞かないんだもの、あの子：気負いすぎだと思
うのだけど…」

そこで小次郎は季衣のことを考える

あの子は純粹過ぎるところがある、寧ろそれは美点ともいえるのだ
が華琳が今言ったように気負いすぎて無理をしている節がある自分
の気づかぬ内に心と体が悲鳴をあげる事態になるかもしれない

「そのことも含め、季衣のこと：頼むわよ」

「了解しました…」

執務室を出ようとする小次郎を華琳が呼び止める

「悪いわね、本来ならあなたも街の巡察に連れて行くつもりだった
のだけど…」

「いえ、構いません：春蘭殿も楽しみにしてるようでしたし」

「確かにあの子は楽しみにしているでしょうね」

「はい、しかし…反対側の壁が大きく破損している箇所がありまして、そこから逃亡される可能性も」

「では隊を二つに分けて両方から抑えます」

「はっ！」

「兄ちゃん、ボクの隊は正面にまわして」

「では、私の隊は反対側で逃げてくる敵を待ち伏せますので正面は季衣殿に任せます…」

「りょーかい」

こうして隊は半分に分けられ季衣の隊が正面から突入し反対側に逃げてくる敵を小次郎の隊が迎え撃つ作戦が考えられた

小次郎は反対側に行き壁を確認した、斥候の報告どおり大きく破損しており一度に二人程度の人間が通れそうなくらい崩れていた

「許緒將軍に作戦開始を…」

「はっ…」

小次郎の命を受けた兵が静かに移動する

暫くして寺院内が騒がしくなった、季衣の部隊が突入を開始したの

がわかつた

「もうすぐ敵がこちらに逃げてきます、一人たりとも逃がさぬ様に」

「はっ！」

「許緒將軍、配置完了しました。」

「わかった、みんないくよ…」

「はっ……」

気配を殺しながら移動する、幸いに周りは暗く急襲するにはもってこいの状況だった

木の陰から寺院を見る……入口には見張り二人いた

「よし、見張りがいるけどこのまま一気に突入するよ」

「はっ」

「抵抗する人はしょうがないけど降伏した人には縄で縛るだけにし

てね…」

「「「はっ」」」

「それじゃ、突入ー！」

「「「おう！！」」」

その声と共に季衣の部隊は寺院に突入を開始した

「敵か…！」

「ごめん！！」

そういつて見張りをしていた男を鉄球でなぎ払う、手加減はしたが骨は砕けただろう

寺院内に入り開口一番に小次郎に教えてもらった台詞を叫ぶ

「御用改めである！！、速やかに縄につけい！」

「「「か、官軍か！？」」」

族達が慌てながら逃亡を図るがその半数は取り押さえられるか又は抵抗し切られて死亡していた
もう半数は作戦通り味方が待ち伏せている反対側へ逃亡しようとしており作戦は完遂されるかと思われたが…

「許緒將軍、あそこを！」

「えっ！」

兵の指差す方向に目をやると一人の男が壁をよじ登り逃亡を図っていた

「逃がすかー！」

「ひひい！」

急いで走り出すが男は壁の向こう側に消えた

今から入口から出ていては追いつけない、そう判断して鉄球で壁を
粉砕する

「どっちに…」

壊した壁から外に出て必死に周りを見回し男の姿をさがす……

「見つけた！」

男の背中を追う……まずいあの方角には町がある、自然と走る足に力が入った

[illegible]

秋月小次郎の予想通り敵は壁の破損した箇所から逃亡を図ったがそこには既に武器を構えた兵が待ち構えていた

小次郎は刀を抜きながら淡々と言う

「既に貴様らは包囲されている、素直に投降すれば命は助ける」

「な、なめやがってー!」

その言葉に怒り敵の一人が切りかかってくるが受け流し首を刎ねる
その光景みた敵は抵抗を諦め武器を捨てた

「秋月様、全員の拘束を完了しました」

「ご苦労様です…このまま許緒將軍と合流します」

「はっ!」

小次郎の部隊が季衣の部隊と合流したが問題が起きた…
季衣がいない、その事を不思議に思い季衣の部隊の兵に聞く

「許緒將軍はどちらに?」

「あ、秋月様…それが…逃げた族を追って……」

「一人で…ですか?」

「はい…」

その報告を聞き思わず舌打ちをする、季衣ほどの腕前なら大丈夫だろうが万が一の事もある…今すぐ後を追いたいけどの方角に行っただけかではないから追いがなかった

「仕方がありません一刻（二時間）ここで待機しましょう、族の監視も忘れずに」

「はっ！・・・しかし許緒將軍はいかがでしょうか？」

「一刻経っても戻らない場合は…置いていきます」

「そんなっ…」

「やむを得ません、いつまでもここに留まってるわけにもいきません…」

「了解しました…」

それから半刻したところで季衣は戻ってきた

小次郎が急いで駆け寄るがその表情は暗く、目尻には涙が溜まっていた

「季衣殿、大丈夫で「ごめんなさい…」 え…？」

小次郎は固まってしまった季衣がいきなり謝罪の言葉を発したのだ
今にも泣き出しそうな季衣を宥めつつ事情を聞く

どうやら族を追っていたが町に入られ見失ってしまっていて、そのことに対して責任を感じて悔いていた様だ

小次郎はため息を吐きつつ季衣と視線を合わせるが季衣の逸らして

しまう

「季衣殿、季衣殿は役目をしっかり果たしました…だから責任を感じる必要はありません」

「でも…」

「私が言いたいのは族を逃がしたことなく、一人で無茶をしたことです」

「え…」

「今の季衣殿には頼れる仲間や部下がいます、もう少し頼ってもいいと思いますが…」

その言葉の後にチラリと後ろを見ると多くの兵がこちらに駆け寄ってきた

「許緒將軍！ よくご無事で！」

「心配しましたよ！」

「不安で生きた心地がしませんでした…」

「もう少しで探しにいくところでしたよ」

口々に季衣が戻ってきたことに喜びの言葉を出す

「みんな…」

「ですから…胸をはって帰りましょう」

小次郎が手を差し出す

「うん！」

季衣はその手を握り締め大きな声で答えた

「兄ちゃん、ごめんなさい」

「季衣殿…先程言いましたが」

「一人で無茶してごめんなさい」

「…次からはもうしないで下さいね」

「えへへ」

その帰り道で部下から季衣を心配して右往左往する小次郎の様子を話され笑い話の種にされるが当の本人は眉一つ動かさずにその会話を聞いていた

この数日後、大陸全土に黄巾をつけた族が一斉に蜂起した
後に「黄巾の乱」と称される戦乱の幕開けである

第九話（後書き）

あれ〜？季衣√突入か？

誤字・脱字・批判・アドバイスがありましたら
是非お願いします

第十話（前書き）

台詞ばかりで地の文少なすぎる…
何とかせにゃ…

第十話

秋月小次郎属する曹操軍は領内に突如現れた「黄色い布を身に着けた暴徒」の鎮圧が行われていた、一つの集団自体の戦力はたいしたことは無いのだが複数の集団が異なる場所で現れるため全軍を二つに分けて対応することになった

小次郎は秋蘭と共に出撃し暴徒と交戦：弓を放ち怯んだところを歩兵で叩く”正攻法”でこれを撃破した

「秋蘭殿、追撃隊が帰還しました」

「よし、これより陳留に帰還するする」

「了解しました…」

「しかし、やはり事前の報告通り黄色い布か…」

「ほぼ全ての暴徒が頭や腕に巻いてましたから偶然ではないでしょう…こうも頻繁に出られては兵の疲労も溜まる一方です」

沈黙が続いたが秋蘭が口を開く

「まあ、その点は帰還した後を追々考えよう…」

「そうですね」

部隊は途中で春蘭・季衣の部隊と合流し華琳の待つ居城に帰還した

――――

「そう、やはり黄色い布が…」

帰還した翌日の朝議の場で華琳が言う
議題は当然、例の暴徒についてである

「暴徒共は我が領内だけではなく北は北平、南は零陵、西は漢中、
東は柴桑で確認されてます」

桂花が報告書を見ながら華琳に報告する

「文字通り、大陸全土ね…」

「はい、その全てが今回のように黄色い布を身に付けております」

「それ以外は？」

「はっ！　どうやら暴徒の首領の名は張角というのですがそれ以外
は正体不明…申し訳ありません…」

「正体不明ね…」

「はい、捕縛した者を尋問しても口を割りませんでした」

そこで華琳は小次郎が手を上げてるのに気づく

「小次郎、何か？」

「はい」

小次郎が席を立ち発言する

「今回の暴徒：”黄巾族”と仮称しますが：昨日は私が捕らえた黄巾族を尋問したのですが、どうやら口を割らなかったのではなく”本当に知らない”可能性もあります」

「何を言ってるのだ？ 族が首領のことを知らない訳がないだろう」
春蘭が疑問を口にする

「普通ならそうなのですが今回の黄巾族の活動範囲は余りに広すぎます、恐らくは首領である張角だけではなくそれに便乗した者たちが今回の騒動を引き起こしているという事が考えられます」

「ん？ つまり、どうゆうことだ？」

「姉者、秋月は張角が中心にいただけで後は周りが勝手に暴れている…と言っておるのだ」

「なるほど、張角は悪くないんだな…」

「」「はあ：」「」

「あれ…？」

場にため息が広がるがいち早く回復した華琳が小次郎に言う

「でも、それは推測なのでしょう？」

「はい、全て私の想像です」

「おもしろい考えだけど、推測で今後の方針を決めるわけにはいかないわ」

「はい…」

「でも、可能性の一つとして覚えておくわ…それと今後は小次郎の言うとおり暴徒は黄巾族と呼ぶことにする」

「私からは以上です…」

発言を終えた小次郎が着席した後に華琳が情報収集をして張角の正体を確かめる方針を決定して朝議が終了した
それぞれの持ち場に戻ろうと全員が席を立とうとしたところに兵が一人駆け込んで報告してきた

「報告します、南西の村で新たな暴徒が発生しました、例の黄色い布です！」

「休む暇が無いわね…でも考えようによっては貴重な情報源ね、今度は誰が行ってくれるかしら？」

「はい！　ボクが行きます」

華琳の言葉に季衣が一番に手を上げるが華琳は難色を示す

「…季衣、お前は最近よく働いているここ暫く休んでないだろう」

「でも春蘭さま…」

「華琳殿、ここは私か秋蘭殿に任せたほうが宜しいかと…」

「兄ちゃんまでっ!」

「季衣殿は春蘭殿の言う様に働きすぎです、少し休まなくてはいけません」

「でもっ!」

「以前した約束…忘れましたか」

「うっ…わかったよ」

そう言って季衣は一步下がる

「では、今回は秋蘭に行ってもらいましょう」

「御意…」

「それから、小次郎…」

「はい」

「貴方も最近働きすぎよ、人の事いえないわ…」

「………了解しました」

「では…解散!」

その言葉と共に皆が動き出す

華琳は執務室で政務：

秋蘭と桂花は部隊の編成：

春蘭は部隊の調練：

小次郎と季衣は：仕事を取り上げられて、華琳に警邏という名目で町に放り出された

「はあ……」

季衣が溜め息を出す

「今ので五回目ですよ…」

「だってみんなして、休め休めってボク疲れてないのに……」

「皆、季衣殿を心配してるのですよ」

「それはわかってるんだけど…」

「それに、警邏も立派な仕事ですよ……」

「う…それもわかってるけど…」

季衣は言葉に詰まり、場の空気が重くなる
その空気を払おうと小次郎が提案する

「折角ですから、秋蘭殿の見送りに行きますか？」

「え？…」

「そろそろ出発の時間だと思うのですが」

「うん、行こう！ 行こう！」

そう言って季衣は走り出す
それを小次郎は歩きながら追う

季衣が城門に着くと今まさに秋蘭の部隊が出撃する場面だった

「秋蘭さま~~~~~！！」

「む、季衣か…」

季衣の声を聞き秋蘭は馬を止める

「間に合ってよかったです…」

「季衣…朝議でも言ったが連れて行けぬぞ」

「いえ、見送りに来たんです」

「そうか、それは嬉しいな…」

秋蘭は笑顔で答えると季衣の後から小次郎も出てきた

「秋月も来たのか…」

「ええ、秋蘭殿…御武運を」

「ああ…では、行ってくる」

そう言って秋蘭は馬を歩かす、その背中に向かって季衣は手を大きく振り姿が見えなくなるまで振り続けた

「行こう兄ちゃん、警邏も立派な仕事なんですよ」

その顔には笑顔が戻っていた

「~~~~~♪」

季衣は歌を口ずさみながら小次郎の前を歩いていた、その歌はお世辞にも旨いとは言えなかったが心なしか元氣が出てくるような歌であった

小次郎が空を見上げると日が真上にあり昼の時間を告げていた

「季衣殿、昼食をとりませんか？」

「兄ちゃんの奢り？」

「生憎、人に奢れるほど持ち合わせはありませんよ…」

「えへへ、冗談・冗談」

（季衣殿相手に奢ったら財布の中身が無くなってしまう…）

「・・・？、兄ちゃんどうしたの？」

「いえ、何でもないです」

昼食は季衣の御墨付きのラーメン屋でとることになり二人で食事を済ませている途中で小次郎が季衣に先程の歌について聞く

「ああ…あれは前に町に来ていた旅芸人さんが歌ってたんだよ」

「旅芸人ですか…」

小次郎がそう言いつつお茶を飲む

「確か、名前は…張角さんだっけ…」

「ぶツツ！」

「わぁ！ 兄ちゃん大丈夫!？」

「だ、大丈夫です…」

お茶を噎せている小次郎に季衣は心配そうに声をかけるが小次郎は暫くして落ち着きを取り戻した

「季衣殿、先程の旅芸人の名はなんと言いましたか？」

「え、張角さん…」

「では、朝議で言われてた黄巾族の首領の名前は？」

「たしか…：張角、あ！」

「急いで華琳殿に報告しなければ」

「うん！」

余談だが季衣が財布を忘れて季衣の分も小次郎が支払うことになった

— — — — —

「間違いありません華琳様、村の聞き込みでも歌を歌う旅芸人の三人組が目撃されてます」

「以前に黄巾族が現れた近辺でも同じ目撃情報がありました」

「そう、間違いないわね…」

季衣の情報、秋蘭の部隊が持ち帰った情報、桂花が放った間者の情報を統合した結果…張角は女三人組の旅芸人の内に一人だということが判明したが…

「正体は分かったのだけど、張角の目的は依然として不明か…」

「そうですね…」

ここで本来なら張角の言葉がどうの、それを聞いたファンがどうの思いつくが…悲しいかな幕末育ちの秋月小次郎にはそんな知識や発想はない

「まあ、我が覇道の邪魔になるなら遠慮なく叩き潰すだけね、今日の夕方に都から軍令が届いたわ、早急に黄巾の賊徒を平定せよ…とね」

「今頃ですか…当の昔に出ているものだ…」

「残念だけど、これが今の朝廷よ」

華琳が呆れ顔で言うところ春蘭が慌てた様子で部屋に入ってきた

「どうしたの春蘭？ 兵の準備は終わったかしら」

「いえ、黄巾族が現れました、それも今までにないほどの規模のようです」

「・・・そう」

「後手に回ってしまいましたね…」

「泣き言を言ってられないわ、春蘭…兵の準備は？」

「申し訳ありません、最後の物資搬入が明日の払暁になるそうで…
すでに兵は休憩させてます」

「そう、万全の状態で当たりたかったけど…時間もない、さて…」

「華琳様！」

季衣が又もや一番に手を上げる

「……………」

華琳は無言で季衣の顔を見る

「華琳様！　ボクが行きます」

「季衣、お前はしばらく休んどけといったであろう」

「大丈夫です！　今日しっかりと休みました」

「……………」

「それに、みんなが戦ってるの休んでなんかいられません！」

「分かったわ…季衣に任せるわ」

「華琳様…」

「春蘭、今すぐ動かせる部隊は」

「はっ、当直の部隊と最終確認をさせてる部隊がまだ残ってるはず
です」

「よろしい、季衣…その部隊を率いて先発隊としてすぐに出なさい」

「はいっ！」

「それから、秋蘭と小次郎を補佐につける」

「御意」

「了解しました…」

「え・・・」

「秋蘭にはここ数日無理をさせてるからあくまで補佐よ、季衣やるわね？」

「はい…秋蘭様、兄ちゃんよろしくお願いします」

「うむ、よろしく頼むぞ、季衣」

「季衣殿なら何の問題もないかと…」

「えへへ、なんか照れちゃいます…」

季衣が照れくささに苦笑する

「ただし撤退の判断は秋蘭が出すから必ず従うように、本隊も準備でき次第すぐに追うわ」

「わかりました。」

「春蘭と桂花は本隊の再編成を…」

「御意！」

「今回の本隊は私が指揮を執る、以上：解散！」

いま城門の前には季衣、小次郎、秋蘭の三人と先発隊の兵がいる

先頭に立つた季衣が大声で兵に叫ぶように言う

「みんな！　これからボク達は黄巾族に襲われている村を救うために先発隊として向かう！　辛いかもしれないけど村のみんなや一緒に戦う仲間を守るため頑張って！」

「「「おおおとおつ！」「」

季衣の言葉に兵達は大声で答える

「それじゃあ、出撃ー！ー！」

その声と共に先発隊は闇夜の中走り出した…

第十話（後書き）

誤字・脱字・批判・アドバイスがありましたら
是非お願いします

第十一話前編（前書き）

関西弁がなく鬼門だなく

第十一話前編

「許緒將軍！ 見えました」

先行していた兵の報告がはいる
前を見ていると目標の村が見えた、しかし村の所々から黒煙が立ち昇っていた…

「間に合わなかったの…」

「季衣、そう判断するのは早計だ…秋月、すまんが数人連れて村の様子を見てきてくれるか？」

「わかりました…」

小次郎が村に向けて馬を走らす

「残りの者は周りの警戒！ まだ敵がいるやもしれん」

「「はっ！」」

「これは…酷いな」

小次郎は村の入口に馬を置き村の中に入ったがその光景は地獄だつた…

あちこちの建物は破壊され中は蹂躪され尽くしていた

小次郎は不思議に思う…人の死体が無い

黄巾族に襲われたのなら少なからず虐殺があっただろう
しかし、建物の中や道端には死体が無かった

「無事に逃げたか、それとも連れて行かれたか…」

「秋月様、生存者は村の中央に集まっているようです！」

「…！　すぐに向かいます」

小次郎は兵の一人に先発隊を連れて来るように命じ
兵の案内で村の中央に進んだ

「生存者と聞きましたが…」

「はい、村の中央に大屋敷があり…そこに避難しております、あと…」

「何か？」

「大梁義勇軍…と名乗る者達もいまして」

「義勇軍ですか…」

「はい…着きました、ここです」

大屋敷の前には三人組の少女が立っていた

「お持ちしておりました…」

先頭に立った少女が掌に拳を当て礼をする

「あなたは…？」

「私は大梁義勇軍の楽進、こちらは同じく義勇軍の李典に于禁」

楽進の紹介を受けて後ろの二人も礼をする

「私は曹操軍の客将の秋月小次郎、楽進殿…現在の状況を教えてください」

「はい、わかりました…」

楽進の説明を始める

黄巾族が村を襲撃し住民を避難させこれを迎え撃つも数で押されやつの事で引かず、そして今もう一度来るであろう黄巾族に備えて防柵を建造している最中であつた

「大体の事情は把握しました、これから…」

「兄ちゃん！」

「秋月」

ここで季衣と秋蘭が合流し義勇軍と協力して黄巾族を迎え撃つことが決まった

その際、秋蘭と樂進が顔見知りであることが判明した、秋蘭曰く「見事な竹籠を売ってもらった…」とか

（そういえば以前、華琳殿に竹籠を土産に頂いたな…）

（そういえば以前、春蘭様に竹籠と服をお土産に貰ったような…）

小次郎と季衣はそんなことを考えながら防柵作成の手伝いに向かった

— — — — —

「李典殿、木材はどこに置きましたか？」

「あ、そこに置いといてくれますう…」

「わかりました…」

小次郎に背中を向けたまま李典は慣れた手つきで防柵を組み立てていく

「うまいものですね…」

「ウチ、何かを組み立てるの好きなんですよ…」

「そうなんですか」

「あ、ここ抑えてくれる？」

「はい…」

李典の示す場所を押さえる

「おおきに」

「李典殿、ここにも木材を足したほうがいいのでは？」

「ああ、そうしたいのは山々やけど…材料が足りんから」

「そうですか…」

「兄さん、ここはもういいから沙和…于禁の所にでも手伝いに行つてあげてくれへん？」

「わかりました…」

小次郎は来た道を走り出す

「于禁殿、何か手伝いましょうか？」

「あ、ちょっと手伝ってほしいの」

そういつて足元の大きな箱と小さな箱がを指差す、中には薬や包帯

など医療品が入っていた

「大屋敷に運びたいんだけど一人じゃ重くて…」

「わかりました、こっちは私が持つので…于禁殿はそっちをお願いします」

小次郎が大きな箱を持つ、たしかに女性が持つには重過ぎるが小次郎からすればどうということは無かった

「于禁殿はなぜ義勇軍に？」

小次郎が医療品を運ぶ歩みを止めずに于禁に聞く

「風ちゃんと真桜ちゃんと一緒に困ってる人を助けたいからなの」

「それはあの二人の真名ですか？」

「そうなの、でも私は二人みたいに特技ないから…」

于禁は少し暗い表情で言う

「別に気にする必要はないと思いますが…」

「え?…」

「要は自分の出来る事を最大限すればいいのです、于禁殿は于禁殿の出来る事をすればいいのです」

「私の出来る事…うん！ わかったの」

そう言って彼女は歩き出す、心なしかその歩みは少し軽くなった気がした

医療品を届けて大屋敷を後にしようとした小次郎は秋蘭の命を受けた兵に呼び出された

「お持たせしました」

「いや、調度いい時に来た」

部屋には秋蘭の他に楽進が居り、机の上にはこの村の地図が広げられていた

「それで、用とは？」

「ああ、黄巾族の襲撃に備えての配置の確認だ」

秋蘭は地図の中心を指差す

「ここが今、我々がいる屋敷で多くの民が避難している、いわば本陣と言ったところか：この場所はなんとしても死守しなければなら
ない」

次に大屋敷に続いている三つの大通りを示す

「本陣に敵を侵入させないためには西側・北側・東側の大通りを封鎖して兵を置く…ここまではいいか？」

「はい…」

「私は中央で指揮を執り西側は李典隊・于禁隊が、北側は季衣が守る、秋月には東側を楽進と共に守ってくれ」

「了解しました、楽進殿…よろしくお願いします」

「いえ、こちらこそ…」

「東側の防柵は材料が足りなくてな、他より厳しいがお前なら問題なからう…二人とも頼むぞ」

「「はい」」

秋蘭の言葉に小次郎と楽進は堂々と答える

「秋月殿は凄いですね、曹操軍の二枚看板で在らせられる夏侯淵將軍にあそこまで信頼されてるとは…」

東側の大通りで兵の配置をしている小次郎に楽進は尊敬の眼差しを向ける

「初めから信頼されてたわけじゃありませんよ、初対面の時は弓を向けられましたから…」

「何をしたんですか…」

尊敬の眼差しが軽蔑の眼差しに変わるが、小次郎は気にしない

「少し前までは当ても無く放浪していたのですが、途中で族に襲われて返り討ちにしたのですが…それを見た夏侯淵將軍が辻斬りと勘違いして城に連行されまして」

「そのようなことが」

「まあ、その縁でこうして曹操軍の客将をさせてもらっているのですが…あの時は死を覚悟しました」

小次郎は昔を懐かしむように言う、思えばあの出来事が遠い昔のように思えてくる

その際新撰組の事を考えそうになったが頭を少し振って頭の外に出した、思い出したくない訳でないが今は考えてもしようがない…帰還する方法がないと言い訳して考えないようにしている

「配置完了しました」

「では見張り以外の者には休憩するように」

「はっ」

「楽進殿も敵襲に備えて休んでいてください」

「いえ、自分はまだ…」

「休めるときに休んどかないと体が持ちません」

「…了解しました」

楽進は大屋敷に向けて歩き出す、小次郎は休憩している兵に声をかけに回った

それから一刻半過ぎた頃だろうか…

小次郎の耳に敵の襲来を告げる銅鑼の音が聞こえた
すばやく刀を握り駆け出す

「敵は？」

「敵の総数は六千から七千、村の三方向から真っ直ぐ向かってきます」

「城壁から弓兵が対処していますが…敵の勢い激しく、突入されるのも時間の問題かと」

「わかりました、では事前の通りに城壁に取り付かれたら弓兵はすぐに退避させて防柵の後ろに配置するように」

「了解しました」

兵が城壁に向けて走り出す、暫くして弓兵と共に戻ってくる

弓兵は素早く防柵の後ろに立ち弓を構える、それを確認した小次郎は兵に向けて命じる

「これより突入してくる敵を迎え撃つ、一人たりとも通さないでください」

「「「おうっ!」「」」」

小次郎は前を見据える、黄巾を身に付けた賊徒が大挙として押し寄せてくる

「弓兵! 構え! 放て!」

その言葉と共に多くの矢が放たれ敵に刺さるが敵は一瞬怯んだ後、再び向かってきた

「突撃――!」

「秋月殿に遅れるな!」

「「「おお――!」「」」」

小次郎は刀を抜き敵目掛け走り出し、敵の先陣を迎え撃つ

「はあっ!」

刀を大きく横に薙ぎ払い、敵を三人の腹を纏めて切る
返す刀を切り上げ一人の胸を裂く体の勢い殺さずに回転しながら敵を切りつける
いつもと違い敵の攻撃を受け流している暇はない、自分から攻めなければならなかった

(凄い…)

楽進は思う、あの細い剣で敵を縦横無尽に切り裂いていく小次郎に…強いのは分かっていたが、一度に複数の敵を切り倒す様は圧巻であった

自然と体に力が入る…武人の血が騒ぐのがわかった

「私も負けられない！」

それはその場にいる全ての味方の思いと同じであった

小次郎や楽進の奮戦とそれに呼応した味方の士気により東側は優勢に戦況が進んでいた

元々、数でしか理の無い黄巾族が村に突入したことにより市街戦となり大軍の優位を生かせずにいた

対し、防衛側は小次郎と楽進…そして曹操軍の精鋭が少数ながらも密集したことによりその力をいかなく発揮したのだが…それは”東側だけ”の事であった

「秋月殿、西側の大通りの二つ目の防柵まで突破されました！」

兵の報告を聞いた楽進が叫ぶ

「東側^{こちから}の後方部隊を西側の援軍にまわしてください」

「了解！」

東側の優勢はあくまで局地的なもの全体から見れば劣勢といっても良かった

――――

いったいどの位の時間が経っただろう

流石に疲労が溜まり動きが鈍くなっていく…しっかり握っているはずの刀がすっぱ抜けそうになる

（このままでは…）

小次郎がそう思ったときに再び銅鑼の音が耳に入った
その音は村の外から聞こえてくる

（敵の増援か、それとも援軍か）

そのとき味方の兵が大声で叫ぶ声が聞こえた

「援軍です！！ 曹操様の本隊が到着しました」

「「「「「おおー！ー！ー！ー！」」」」」

その言葉に多くの兵が歓声を上げ、敵は村の外に撤退を始めた

「逃がすな！ 追撃！」

小次郎が残り僅かな気力を振り絞り命じる

その命を聞き多くの男達が雄叫びを上げながら追撃を開始する

「何とかなったな…」

「秋月殿、ご無事ですか！？」

楽進が此方に走ってくる

「疲れはしましたが、なんとか…」

「そうですか…よかった」

「それより、他の方達と合流しましょう…本陣に集まってると思いますし」

————————————————————

小次郎と楽進が大屋敷につくと思ったとおりすでに皆が集まっていた

「皆さんも無事でしたか…」

「ああ、なんとかな」

「ちょっと、お腹が空いたかな」

「いや、東側の援軍が無かったらやられとったわ：ほんまに助かったで」

「ありがとうなの」

皆、仲間の無事を喜び話が進む：そこに春蘭が走ってきた

「秋蘭！季衣！無事か！？」

「危ないところだったが、なんとかな」

「春蘭さまー！助かりました」

「お蔭様で…」

「む、秋月いたのか…」

「いましたよ…」

「冗談だ、お前は殺しても死なないだろうから最初から心配していいない」

「…褒め言葉として受け取っておきます（意外と的を射た発言だな）」

その後、華琳も合流し秋蘭を中心に報告していく報告が終わり華琳が義勇軍の三人に礼を言ったところで季衣が義勇軍を華琳の部下にしてくれないかと頼む、華琳は小次郎と秋蘭に意見を聞いたが二人とも季衣の提案に賛同した、これを聞き華琳も季衣の提案を受け入

れて三人と真名の交換を行った

「そう、じゃあ小次郎」

「はい」

「大梁義勇軍を貴方の指揮下に預けるわ」

「私の…ですか？」

「貴方もいい加減、春蘭や秋蘭の部隊の副将の真似事じゃなくて自分の部隊を持つべきよ」

「…了解しました」

小次郎は三人を見ながら言う

「改めて名乗らせてもらいます、曹操軍客将…姓は秋月…名は小次郎…字と真名はありません」

その言葉に三人も続く

「楽進 文謙…真名は風、再び貴方と戦えることを嬉しく思います」

「李典 曼成…真名は真桜や、以後よろしゅう」

「于禁 文則…真名は沙和なの、これからよろしくお願いしますなのー」

ここに曹操軍の遊撃隊”秋月隊”が誕生した

第十一話前編（後書き）

誤字・脱字・批判・アドバイス（特に関西弁）がありましたら是非お願いします

第十一話後編（前書き）

寒い、モチベがあがらない、冬眠したい

第十一話後編

秋月小次郎は指揮下に加わった風・真桜・沙和との挨拶もそこそこに村の外に組まれた陣で軍議に参加していた

「さて、これからどうするかだけど…新しく参入した風たちもいることだし、一度状況をまとめましょう…春蘭」

「はっ、我々の敵は黄巾族と呼ばれる暴徒の集団だ、細かいことは…秋月、任せた」

「…わかりました」

小次郎は一步前に出て発言する

「黄巾族の構成員は若者を中心として散発的に暴動や略奪行為を繰り返していますが、特に主張などもなく目的も不明…また首領の張角も旅芸人の女三人組の一人という点以外は分かっていません…」

「分からんことだらけやな」

真桜が眉間に手を当てながら言う

「ええ、せめて張角の目的さえ判明すれば対策や行動予測も出来るのです…」

「隊長、少しいいでしょうか？」

「風殿、何か？」

「はい、今回の暴徒は地元の盗賊団と合流して暴れていましたが：陳留では違うのですか？」

「いえ、当初はそのようなことは無かったのですが、ここ最近では今回と同じように別の集団と合流して行動しているのが確認され黄巾族の組織化が進んでいます、こうなると先ずは首領の張角を討ち組織の瓦解を誘いたいのですが：」

「張角の所在が分からないと：」

「そのとおりです華琳殿、元々旅芸人のこともあってか本拠地を持たずに各地を転々していると思われます：」

「でも、だからこそ張角を討てば曹操軍の名は大陸中に知れ渡るわ」

桂花が声高々に言うとかで復興の指揮を執っていた沙和が陣に戻ってきた

「すいませーん、軍議中、失礼しますなのー」

「どうしたの、また黄巾族がでたの？」

「ううん、そうじゃなくてですねー」

「何だ、早く言え」

沙和のゆったりした声に思わず春蘭が急かす

沙和が言うには村の住民に配ってた食糧が足りなくなった為、従軍

用の粗食を住民に配る許可がほしいというものだった、華琳はここ
で出し渋って住民が暴徒化することを危惧しこれを許したがこれに
より軍の長期行動が不可能になってしまったが小次郎にある考えが
浮かぶ

「華琳殿、一つよろしいでしょうか？」

「なに、小次郎？」

「今回、黄巾族の数はこれまで以上に多くなっています、当然その
分多くの粗食が必要になります」

「なにが言いたいんだ？」

春蘭が小次郎に問う

「つまり、この近くに黄巾族の物資集積所があるはずですが、それを
見つけることが出来れば…」

「ふむ…」

華琳が小次郎の言を聞き、桂花に偵察する場所の候補と経路を割り
出すように命じる

「相手の動きは極めて流動的よ、仕留めるにはこちら素早く動か
なければならぬわ、可能な限り迅速に行動してちょうだい」

「」「はっ！」「」

――

小次郎は真桜と共に村から少し離れた森を偵察していた

「隊長、集積場どころか人っ子一人おらんで…」

「そうですか、どうやら外れを引いたみたいですね」

「そうみたいやね…はあ」

真桜がガックリと肩を落とす、小次郎の目に真桜の武器が写る

「真桜殿、その槍は真桜殿が？」

「うん、ウチの発明品の”螺旋槍”ちゅーて先端が回転するねん」

そう言って真桜は螺旋槍をを高く掲げて轟音と共に先端を回転させる、その絡繰に素直に関心した

「どういう原理で動いてるんですか？」

「え…」

「いえ、どういう原理で…」

「禁則事項や」

真桜は人差し指を唇に当てながらいうのでそれ以上は言及は避けた

そして村に戻ろうとしたときに報告が入った

春蘭の偵察隊が黄巾族の物資集積所を発見、廃棄されていた砦を用しており既に砦を放棄して移転する準備を整えており一刻の猶予も無いためそのまま現地に直行せよ、というものだった

その報告を受けた小次郎と真桜は素早く部隊ををまとめ移動を開始した

小次郎と真桜が部隊に合流した時には既に他の者が揃っていた

「華琳殿、お待たせしました」

「遅いわよ！ 何をしてたのこの鈍間！」

小次郎の言葉に桂花がここぞとばかり暴言を吐いてくる

「そないゆうことないやろ、そもそもこつちが偵察してきた場所と砦、村挟んで真逆の方角やったし…」

「真桜の言う通りよ、桂花…むしろよく間に合ったと言うべきね」

「か、華琳様がそう仰るなら…」

真桜と華琳の弁護により桂花は一步引くが頬肉が痙攣していた

そして改めて状況を報告された、敵の本隊は曹操軍と同じく砦を攻めに來た官軍を迎撃しに出撃しており残る敵も物資の搬送に集中して曹操軍の存在に気づいていない、この内に砦を攻め落とし砦に旗を立て黄巾族と官軍にも曹操軍の存在を知らしめるというものだった

「じゃあ、誰が一番高い所に立てるか競争いませんか？」
と季衣が言い

「お、いいだろう負けないぞ」
春蘭が乗り

「姉者、大人気ないぞ」

「二人共、不謹慎ですよ」

秋蘭と小次郎が咎め

「おもしろいわね、一番高く立てた者のは褒美を出すわ」

「「か、華琳殿（様）…」」

華琳が決定した

「それと、敵の粗食は全て焼き払うこと、持ち帰ることは許さないわ」

そう言って沙和は元気に走り出した

「秋月隊…か」

誰にも聞こえない声で小次郎は言う

そして本陣から銅鑼の音が響く

「秋月隊！ 行動開始！」

秋月隊・・・始動

————————————————————

終わってみれば曹操軍の圧勝であった

突然の攻撃に砦の黄巾族は反撃らしい反撃を出来ずに曹操軍の侵入を許し、既に戦いは砦内の残敵の掃討に移行していた

「はあ！」

「ぐぎゃああ」

「はあああああつ！」

「うがあつ」

小次郎が敵を切り捨て、風が敵を蹴り飛ばし、城壁の上の敵を掃討していく

「隊長、周囲の掃討終了しました」

「ご苦労様です」

風の報告を聞き刀を鞘に収める

「ん？」

「隊長、どうしましたか？」

「真桜殿と沙和殿は？」

「そういえば…」

二人で周りを見渡すが二人の姿は無い、その時下から春蘭の声が響いてきた

「火を放て！ 粗食を持ち帰った者には厳罰に処すぞ！」

「ヒャッハー！ 粗食は焼却やー！」

「焼却なのー！」

探し人の声を聞き、下を覗くと

そこには元気に粗食に火をつける二人の姿が…

「いました…」

「なにをやっているんだか…」

二人して脱力しながら旗を城壁の上に立て、帰投した

――――

砦を後にした曹操軍は簡単な軍議を開かれた

敵の粗食を焼き払ったことにより周辺の黄巾族を牽制することが出来たが、それはあくまで一時的なものであり敵が再び活発化する前に地道に情報収集するしかない、という結論がなされた

「ああ、そうだ…例の旗を一番高い所に立てるという話だけど……誰が一番だったのかしら？」

華琳が思い出したように言う

「本気だったのですか…」

「あゝ、なんか忘れをとると思うたら、それか！」

「はっはっは、初めての戦で、そこまで余裕が無かったか！ まだまだ青いなあ！」

「くうゝ、置いて帰るので精一杯やったわ」

「本当は、粗食に火をつけるのに夢中だったただけではないですか？」

「ぎくう！」

「で、結局は誰なの？」

華琳が聞くが

「「「……………」」」

沈黙が場を支配する

「いえ、恐らくは季衣でしょう」

「…え？、ボク？」

秋蘭に名を呼ばれた季衣は驚いている

どうやら季衣は砦の正殿の屋根の正真正銘”一番高い所”に旗を挿していた、しかし季衣は褒美を貰おうとしても希望がないため華琳は貸し一つということ手で手を打った

軍議が解散となり其々の部隊に戻る途中に今度は小次郎が思い出したように言う

「そういえば、真桜殿・沙和殿…」

「ん？」

「隊長、なんなのー？」

二人は暢気な声で答えるが小次郎の顔は冷たい声で言う

「先の戦闘において、勝手に持ち場を離れたことに対し弁明はありますか？」

「「え…？」」

その言葉に二人は固まる

「勝手に持ち場を離れるのは立派な命令違反です」

そう言いつつ小次郎は刀を抜く

「前に所属していた所では命令違反は切腹…自害を強いられますが…」

「な、風ー！ 助けてー！」

「風ちゃん、隊長をとめてー」

「…命令違反した二人が悪い」

「「そ、そんな」」

二人は風に助けを求めるが冷たく断られる

「もう二度と勝手な行動はしないと誓えば、今回は見逃しますが…」

小次郎のその言葉に二人はガタガタ震えながら首を縦に振る、それを見て小次郎は刀をしまって歩き出す

その後ろ姿を見て、真桜と沙和は思う

”この人を怒らせたらいけない”と……

第十一話後編（後書き）

誤字・脱字・批判・アドバイスがありましたら
是非お願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6054y/>

風雲 恋姫伝

2011年12月3日03時54分発行